



NODA・MAP 第27回公演

「正三角関係」

作・演出：野田秀樹

“LOVE IN ACTION”



「カラマーゾフの兄弟」をモチーフに 強力キャストでおくる NODA・MAPのサスペンス

父親殺しが発端の「カラマーゾフの兄弟」は、野田秀樹を通すとどんな舞台になるのか。キャストの魅力とともに、その一端を語ってくれた。

2024年夏に放つNODA・MAP新作舞台が動き始めている。『正三角関係』と題して届けられるのは、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」をモチーフとして描かれる、日本のとある場所のとある時代の花火師一家の“唐松族の兄弟”の物語。「私が面白いと感じた部分を引き出して、自分の興味ある世界に引きずり込むように作った」と野田秀樹が語る物語には、花火師の長男に松本潤、物理学者の次男に永山瑛太、聖職者の三男に長澤まさみという、強力な三兄弟がそろった。

「潤には昭和の不良のような斜に構えたイメージがあって、そこがこの花火師に重なるなど。まさみちゃんは『THE BEE』(21年)で演じた男性警官役が凛々しかったことに加え、三男の実直さを女性が演じることで嫌みにならないのではないかと。瑛太が演じる次男は原作と同じく無神論者で物語の最後に大きく関わってきますが、神様のことも日本人にとって現実味のある描き方をするので、説得力を持って演じてくれ

ると思います」

この三兄弟が巻き込まれていくのは、原作同様、父親と長男と一人の女の三角関係から発展する父親殺しに端を発する物語だ。その女・グルーシェニカは長澤が二役で演じる。

「グルーシェニカだけ原作と同じ名前になっていますが、清らかな末の弟とは対極にある女性を、まさみちゃんが同時に演じる面白さがあると思っています。また、竹中直人さんがちゃんとひどい父親をやってくれますから(笑)、非常にいいんですよ」

さらに、ロシア領事館の領事夫人・ウワサスキーを演じる池谷のぶえ、長男の許嫁・生方莉奈を村岡希美、唐松家の番頭・小松和重と、ほかのキャストにも太鼓判を押す。

「のぶえさんは、重要なことをうっかり喋り続ける女を演じますが、さすが面白い(笑)。希美は、憎み合っているのになぜか許嫁になるという恋愛の妙を演じてくれますし。小松も父親殺しの現場の一番近くにいた者として、とぼけた

重要な役割を担います」

これらの登場人物によって、父親殺しの謎解きがサスペンス仕立てで綴られる。が、「ただし」と野田は付け加える。

「私が書く話ですから謎は解けないようになっています(笑)。原作があるので謎を解くのは難しいことではないのですが、ぼやかしておきます。また、家族の中で起きた事件ですが、その背景に大きなものが見えてくるとは思います。個人の事件も人間の心理を追えば非常に興味深く、今回も、グルーシェニカと生方莉奈の女同士の心理戦はとて面白いんですけど。でもやっぱり、大きな力の中で身動きが取れなくなっている人間を描いておきたいという思いは、年々強くなっていて。そして、自分にしか書けないものを書くべきだというのは常にあるので。今回もそこを大切に作っています」

加えて、いろいろな“三角”も隠れている模様。NODA・MAPの謎解きこそ面白い。

取材・文：大内弓子(ライター)



上段左から 松本潤 長澤まさみ 永山瑛太
下段左から 村岡希美 池谷のぶえ 小松和重 野田秀樹 竹中直人

7月11日(土)～8月25日(日) プレイハウス 詳細はP08、10へ

作・演出：野田秀樹

出演：
松本潤 長澤まさみ 永山瑛太
村岡希美 池谷のぶえ 小松和重
野田秀樹 竹中直人

秋山遊楽 石川詩織 兼光ほのか 菊沢将憲 久保田武人 後東ようこ
近藤彩香 白倉裕二 代田正彦 八条院藏人 引間文佳 間瀬奈都美
的場祐太 水口早香 森田真和 吉田朋弘 李そじん

北九州、大阪、ロンドン公演あり

<https://www.nodamap.com/seisankaku/>



芸劇dance 中村蓉ダブルビル

「邦子狂詩曲 クニコラブソディー」

振付・構成・演出：中村蓉

Geigeki dance Yo Nakamura Double Bill “KUNIKO Rhapsody”



「花の名前」(再演2023年) 公演より

向田邦子の原作はダンスになり得るか

こんなに「見せない」踊りもないであろう。それでいて、ういういしく、艶っぽい。

静でいて動である。控えめでいながら、陽気である。

—— 向田邦子「大学芸運動会」(『女の人差し指』文春文庫) より



撮影：前澤秀登

芸劇dance 中村蓉ダブルビル『邦子狂詩曲』は、脚本家でありエッセイスト向田邦子のテキストを原作にして展開される、振付家・中村蓉のダンス公演である。

ダブルビルの1本『花の名前』は、向田の短編集『思い出トランプ』所収の「花の名前」を原作としており、近年の中村蓉の代表作でもある。

これまで中村蓉は、原作のあるダンス作品を数多く作ってきた。松本清張、坂口安吾、シェイクスピアからヴァージニア・ウルフ、その中のひとつに向田の『阿修羅のごとく』も含まれる。『花の名前』は、そんな中村蓉の転換期となった作品である。

それまでの中村蓉の作品には、原作を物語として踊る、登場人物になりきる、といった演劇的手法が多く見られた。しかし『花の名前』以降、その手法は鳴りを潜める。同作は朗読が物語を補完してくれるからこそ、ダンサーは電話になり、家具になり、人以外の何かに憑依し始める。また内容の一節や言葉から連想されたイメージが、ダンスに置き換えられ、物語からは乖離したシーンが展開される。これは、これまで物語を踊ってきた中村蓉が、踊りが物語のイメージさえも原作は補完してくれる、と気づいた瞬間でもあった。

出演の福原冠は、初演の『花の名前』に参加す

る予定の役者であった。しかし、コロナの状況で公演は延期、日程の都合でダンサーの長谷川暢が初演に出演することとなる(長谷川は今回、演出協力という形で作品をサポートしている)。福原は山本卓卓が主宰の範囲遊泳に所属する、山本の狂気を体現する役者だ。その狂気性が、向田の作品には必要なピースとなるだろう。

ダブルビル2本目『禍福はあざなえる縄のごとし』では、向田の数々のエッセイをミクスチャーした新作が展開される。「禍福はあざなえる縄のごとし」とは、中国の歴史書である『史記』に記されている言葉である。幸不幸は編まれた2本の縄のように表裏一体、という意味が近いかもしれない。

この言葉は、向田との印象に残ったエピソードとして、黒柳徹子が挙げた言葉である。黒柳は「幸福の縄2本で編んである人生がいいなあ。そういうのはないの？」と向田に尋ねたが、向田は「ない」と断言したそう。向田の作品に漂う空気を表現するのに、これほど適した言葉はないだろう。それを中村蓉は新作のタイトルに選んだ。

出演する島地保武と西山友貴は、言わずもがな日本を代表するダンサーである。中村蓉とは初めてのクリエーションながら、その経験値とメソッドをクリエーションに遺憾なく発揮している。そのふたりと向かい合う振付家・中村蓉

の姿も、新作からは垣間見えるだろう。

振付家、ダンサー、役者、オペラ歌手、作曲家、衣裳デザイナー、裏方含め、この先も舞台業界を担っていくスペシャリストがそろった今公演。彼らがそろわなければ、太刀打ちできない向田邦子、との見方も、またできるかもしれない。

2024年8月には、そんなスペシャリストたちを集めたダンス作品が、ここ東京芸術劇場で上演される。

言葉遊びの巧みな向田の世界を、ダンスはどう遊ぶのか。身体が魅せる言葉遊びの向こう側を、この公演では体験できるだろう。

文：中瀬俊介(映像作家・ドラマトウルク)



8月9日(金)～12日(日) シアターウエスト 詳細はP10へ

振付・構成・演出：中村蓉

「花の名前」
出演：福原冠 和田美樹子 中村蓉
ピアノ演奏：長谷川ミキ

「禍福はあざなえる縄のごとし」
出演：島地保武 西山友貴



撮影：江野智浩